



萬葉集古義

七下地

萬葉集古義

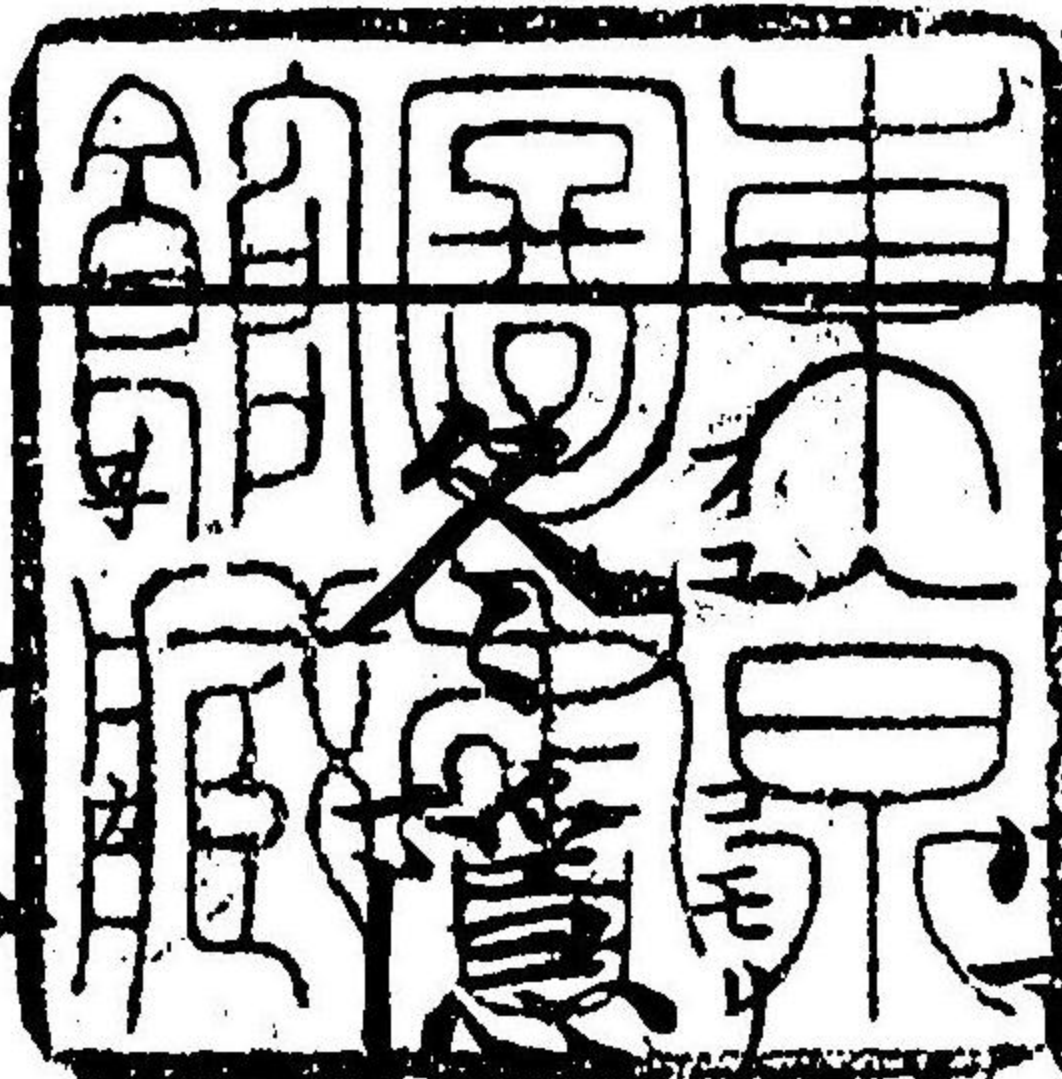
七下地

東泉圖書			
冊	九	六	類
	卷	函	

明治十九年九月十一日内務省交付

ヨス クサニ

寄草



春乃大野乎。燒人者。燒不

足香文。吾情熾。

フユモリ

冬隱ハ春の枕詞なり。既出つ〇歌意ハ春の野をや
人ハ猶やきあらねバふや。こが心をまでやくらむ。さ
てもくるしやと思ひふもゆる心をいへり。さまぐふ
思ふことの志げき心も。野のくさのごとくふればあ

り。と契沖いへり。其意もあるべし。遊

仙窟小。未曾飲炭。腹熱如燒とあり

葛城乃。高間草野。早知而。標指

益乎。今悔拭。

ハヤシリテ
早知而ハ。契沖をやく領してなりといへり。知ハ。領地
の領小テ。吾物小領得たるをいふことなり。○今悔拭
ハ。拭ハ音小テ。シキ。小用ひて。イマソクヤシキ。のとも
思へども。或説小。拭ハ茂の誤小テ。イマシクヤシモ。あ

らむと云るそよるしき。○歌意ハ。葛城の高間の野を。
早く吾物小領得テ。勝示さして。人小とられぬやう小
まべのりしを。あおせざして。人小得られて。今更一を
お小さても悔しく思ふ。よとなり。此歌ハ。この手小
いりぬべき人。を人小とら
れて。くいてよめるなま

吾屋前爾。生土針。従心毛。不想

人之。衣爾須良由奈。

土針ツナリハ草名品物解小具云り物を染る草なるべし○
從心毛ココロヨモハ心裏ウラよりもと云の如し毛ハ表ウラハさるもの
小シラて裏ウラよりも眞實小思ふよくなり○歌意ハ吾カやど
小生る土榛ツナリよ汝ニの心裏ウラよりも眞實小思ふ人ハ他小
あらじと思へバゆめく他人の衣小摺るゝことなる
れとなり吾屋前爾云々と云るハ己ミの手小入さる女
小ことへさるなりとのくいひのゝづらふ人ありと
もこれをウラおきて心の裏ウラよりもおもをぬ人ふりつる
ふといまゝ
むるなり

鴨頭草丹服色取摺目伴移變

色登備之苦沙

歌意ハ鴨頭草小衣ツキクサと練りて摺イロまゐくハ思へども
そのつき草ハ當時ツキハうつくしくけれどもイロをやく變ウツロひ
て色イロのかをりツキをウツロきものとのねて聞されバことい
摺ともをやく變ウツロをむと思ふが苦ウツロさとなりこれ
ハあごなる人のあのみ
がさふあとへり

紫^{ムラサキノイトヲ}絲^ソ乎^{アガ}曾^{ヨル}吾^{アシ}搓^{ヒキ}足^ノ檜^{ヤマ}之^{タチ}。山^{バナ}橘^ヲ乎。

將^{ヌカ}貫^ム跡^ト念^モ而^{ヒテ}。

搓、舊本様小誤。今ハ元曆本小從つ。歌意かくれとる
ところなし。これハ人をふのくおもひ入て。さまぐこ
ころろとつくま

をふとへこり

真^マ珠^{タマ}付^{ツク}越^{ヲチ}能^ノ管^{スガ}原^{ハラ}吾^{アレ}不^{カラ}苧^ズ人^{ヒト}之^ノ

苧^{カラ}卷^{マク}惜^{ヲシキ}管^{スガ}原^{ハラ}。

真^マ珠^{タマ}付^{ツク}ハ枕^{ヲチ}詞^ノナリ。越^{ヲチ}能^ノ管^{スガ}原^{ハラ}ハ十三^サ丁^チ廿^ニ七^シ小^{オキ}息^ナ長^ガ之^ノ
遠^{ヲチ}智^ノ能^コ小^{スガ}管^{スガ}とあると同處の彼ハ近江國坂田郡なり。
又ハ二卷小玉垂之越野とあると同地ならバ大和國
高市郡なり。歌意かくれなし。女と管小とへある

な
り

山^{ヤマ}高^{ダカシ}夕^{ユフ}日^ヒ隱^{カク}奴^リ淺^ヌ茅^{アサ}原^ヂ後^{ハラ}見^ノ多^チ
多^ム

米爾標結申尾。

歌意ハ淺茅原のおもしるきを。日暮て後もか不見愛
むの爲小灼く標結て置べの里しものと山の高き故
小それ小夕日の隠れて見えぬなりぬるゆ急標結て
とをえせざりしを悔るなり契沖云これハ淺茅原の
おもしるきをとりるをしき人小あとして夕日かくれ
ぬとハおもまくあひみてあぬこあれせし後又もみ
ぬこと一なり。のゝらむとしらば淺茅原小あぬゆふ
ごとく人をものこくちざりてのちもあひましまし

のものと悔

るなり

事痛者。左右將爲乎。石代之野。

邊之下草。吾之刈而者。

左右將爲乎ハ。カモカモセムヲと訓べし。畧解ハ。トモ
とよみされども。トモカカモ。おどやう小云むハ古語
ハ聞も及むぬ。バカモ。中比より語。ふこそあれ
六卷。小凡有者。左毛右毛將爲乎。恐跡。振痛袖乎。忍
而有香聞とあり。○歌意ハ石代の野への下草を刈得

るとき思ふ女を得るふるとへさるふて思ふ女を得て
 後小ハ人の物いひの志げくともそれハその時小あ
 さりてともありもせむものをまづ得てこのものと
 ぞふ志さらばよのらむとよせさるなり○舊本此歌
 の下小注して曰一云紅之寫心哉於妹不相將有これ
 ハ右の歌とハ別なり一云とあるハあさらむこれハ
 十一四丁小玉緒之鳥多クヲノウシ鳥ノ意哉年月乃行易及妹爾不
 逢將有ズアラムとある歌の亂れてこゝ小入しもの小やあら
 む

真鳥住マトリスム卯名手ウナテ之神社ノモ之菅根ノスガノ

乎ヲ夜爾書付キヌニカキツケ令服兒キセムコモ欲得ガモ

真鳥住マトリスムハ枕詞マクなり契沖ツクまとりハ鷓カあれバリあてと
 がある鷓カハ海ウミ住スミものあれバリまとりをむ海ウミと云ハ
 けさるものなり又按ツ小鷓カあらむと云ハ木キをまきと云
 如くよろづの鳥を真鳥マトリと云ハツもりハ諸鳥シヨ來て
 あつまるものあれバカ海ウミ之ノ原ハラと云ハツくるといハリ今
 按ツ小字シ奈原ナハラふど云ハ海ウミ之ノ原ハラと云ハツくるといハリ今
 奈ナとハ云ハツあらむ又萬マンの鳥トリをツひらく真鳥マトリと云ハツくるといハリ今
 とハツいハツ仙覺センカク注ツ小真鳥マトリハ鷓カふりえびをハ鷓カの羽ハと
 小なりツハ真鳥マトリの羽ハと云ハツいハツ此説コトふよる小真鳥マトリ大

體小あらばきこ

えあるまゝなり

常ツ子不シラ知ヌ人ヒト國クニ山ヤマ乃ノ秋アキ津ツ野ヌ乃ノ垣カキ

津ツ幡ハタ鴛ラシ夢イメニ見ミシ鴨カモ

常ツ子不シラ知ヌハ舊本小知字落より五卷小都ツ子彌シ斯ラ良ヌ農道乃ミチノ
長手ナカテ表テとよめりさてこの歌小てハ枕詞小て常小經
知ぬ他ヒト國クニとつゞきより○人ヒト國クニ山ヤマハ此上小出より○
秋津野乃垣津幡鴛アキツヌノカキツハタラシとハ契沖アキツヌノカキツハタラシの秋津野小澤ありてそ

れ小おふるかきつをさなりと云るがごとく鴛ラシハ借
字ヨ乎カハ語辭カクニ之ハ例のその一カクニをがなることをいふ助
辭カクニなり○歌意ハ人國山の秋津野のその澤小さきこ
るかきつをこのりるたしき花を現小ハ見ることな
らぎて夢小見一哉となり契沖かきつをさき夢小み
るとよめる喩の心ハかきつをさハ紫小てりるを
ければ色ある人小多とへ夢ハその人をりつとよ
おるえぬをのるののふみるふよをるなりとい
り

姫押ヲミナヘシ。生澤邊之サキサハノ。真田葛原何時マクズハラ。イツ

鴨絡而我衣將服カモクリテ。アガキヌキム。

姫押ハ。ヲ。ナ。ヘ。シ。ナリ。かく書るハ。い。の。なる所由ヨシ。

未詳ならむ。も。ハ。誤字あど。さてこ。ハ。枕詞なり

○生澤邊之ハ。サ。キ。サ。ハ。ノ。ベ。ノ。と訓べ。これ古來

ハ。己。の。を。ド。め。て。考。得。る。よ。み。な。り。生。を。サ。ク。と。訓

例ハ。六。卷。小。春。者。生。管。十。六。小。八。重。花。生。跡。ふ。と

あるが如し。又。十。卷。五。十。六。丁。小。石。走。間。々。生。有。良。花。乃

と。も。よ。ま。て。こ。そ。姫。押。ハ。さ。く。と。云。ふ。の。れ。る。枕。詞。小

ハ。あり。けれ。さて。生。澤。ハ。佐。紀。澤。小。て。四。卷。小。娘。子

部。四。咲。澤。二。生。流。花。勝。見。十。二。小。垣。津。旗。開。澤。生。管

根。之。又。十。卷。小。姫。部。思。咲。野。爾。生。白。管。自。又。佳

人。部。為。咲。野。之。芽。子。爾。十。一。小。垣。津。旗。開。沼。之。管。乎。

などあると同じ。さて佐紀ハ。大和國添上郡の地。名小

て。そ。こ。の。澤。を。佐。紀。澤。と。云。ひ。そ。こ。の。野。を。佐。紀。野。と。云。

そ。こ。の。沼。を。佐。紀。沼。と。よ。め。り。又。佐。紀。山。と。よ。め。り。十

母。佐。紀。山。爾。開。有。櫻。之。花。乃。可。見。と。あり。○歌。意。ハ。佐

紀。澤。の。邊。の。真。葛。を。絡。依。取。來。て。い。つ。の。衣。小。織。て。吾。服

むそ。さても早く衣ふ織て著るなり
となり。女を田葛ふ多とへるなり

於君似草登見從我標之野山

之淺茅。人莫荇根。

於君似云々十九キニニトル 小イモニ妹爾似草等見之欲里吾標之ヨリアガシメシ
野邊之山吹誰可手乎里之とあり○野山之淺茅ノヤマノアサダい
のなり。按ふ山ハ上字の誤ふて。又ノへ歟。淺茅ハ女を
多とへるなり○歌意ハ君小似て。うつくしき草と

見より。我標結置野の淺茅をゆめく謾ふ列てと
ることなあれとあり。女を淺茅ふとふるハ秋小あ
りて。露霜ふあひて色づけるが。紅顔小似るをいふ
あり。契冲云。淺茅を入ふ多とふる小。和漢の心あるべ
し。詩衛風云。手如柔荑。鄭風云。出其闈闈有女如茶。注云。
茶。茅華。詩小かく多とふるハ。つたふの白くうるた
きを。女ふと
とふるなり

三島江之。玉江之。薦乎。從標之。

己我跡曾念雖未蒞。

三島江之玉江ハ攝津國なり十一小三島江之入
江之薦乎蒞爾社吾乎婆公者念有來又三島管未
苗在時待者不著也將成三島管笠などあり○歌意
かくれさるところなし多とへのさまあらはなり

如是爲而也尚哉將老三雪零。

大荒木野之小竹爾不有九二。

如是爲而也といひ尚哉といひて也の疑辭重りてい
のざーきやりふれど古歌ふハその例多きことなり
既く委説るの如し○尚哉將老ハ尚ハ借字小て黙止
ありて老ふむのと云なりをべて奈保ハ事を起し
つることなくしてさぶあるを云ことなり續紀十卷
詔小猶在倍伎物爾有禮夜止思行之且云々とある猶
も借字小て此歌ある小同ド委くハ五上九下小奈保
奈保爾伊弊爾可弊利提云々とある歌の注小例ども
を載り考合べし○三雪零ハさして用ふるゝあ
枕詞の如く云るなり○大荒木野ハ神名式小大和

國宇智郡荒木神社とある所なるべしと契沖云り古
 今集ふ大あらしのむりの下草老ぬれば駒も老さめ
 るある人もなし曾丹集ふも大あらしのをさゝの原
 とよめり〇歌意ハ大あらし野の小竹の人小川のこ
 されしこそつひふる人もかくていさづら小年經
 るものおれその大あらし野のあぬふもあらぬこと
 あるをこれハ人小いさあをるゝこともなく黙止あ
 りてこのまゝ小年の老をてなむのと云なるべし十
 一〇ハ如是爲哉猶八成牛鳴大荒木
 之浮田之杜之標爾不有爾とて載

淡海之哉。八橋乃小竹乎。不造。

矢而信有得哉。戀敷鬼乎。

信有得哉ハ。マコトアリ。エムヤと訓べし。十五
 於毛波受母麻許等安里衣牟也。と假字書あり。又サ子
 アリ。エムヤと訓べし。九卷廿二。小核不所忘面影思
 天十四。小安志可流登我毛左禰見延奈久爾。十五
 丁。小伎美爾故布良牟比等波左禰安良自。又廿五。夜須
 久奴流欲波佐禰奈伎母能乎。十八。廿五。小由可牟登於

毛倍騰與之母佐禰奈之廿卷十一小伎美乎安我毛布
 登伎波左禰奈之ハサチナシふどあればなり○歌意ハ矢橋の小
 竹を取來て矢小造る如くこの思ふ人とこの物と領
 得ててまことふありえられむものゝハのほと小
 こひく思たるものをと云るなり舊説矢橋の名
 れば矢小造るべきと云意ありといへれどこれハ
 必矢橋と云ふハかゝらぬあるべし所ハいづくふ
 もあればハ小竹を矢小
 来るを云
 るあるむ

月草爾衣者將摺朝露爾所沾

ツキクサニコロモハスラムアサツユニヌレ

而後テノチニハ者徒去友ウツロヒヌトモ

歌意ハ月草のうつくき色ふて衣ハ摺て染むよ
 や朝露ふぬれて後ふうつろひかをりハとよそ
 こハいとハトとなり人の心のうつりのをりやをき
 と月草ふとへ朝露ふぬれて後と云ハかふそを
 ることあればやびて心のあをるふよせりかをり
 やをき人の心ハまこいなふそをることあればや
 びてうつろふものふてこのみふなりあけけれど後
 の事ハとまれそれまでハ思えぬまづ志むなりと

も、うつくしき人小相見むとなり。現存六帖小月草小
 衣ハモラジウツル
 ふを心の色と人もこそみれとあるハ、今の歌小本
 よみあがら意ハウラウヘあり契沖云、今の歌古今集
 秋、上小載さるハ、萬葉集小いらぬ、ふるき歌をさ
 つるといへども、かむのへも、抑古今集小、萬葉集の
 といへるハ、さることなり、抑古今集小、萬葉集の
 入さる、これのれある小、つきて、か小、あ、い、ふ、み
 いふ人あれど、さのみ疑ふべき、か小、あ、い、ふ、み
 ふ、の、延喜の頃ハ、既古風ハ、うせをて、九を世の
 人、萬葉をよくよみ、こさめ、ハ、あ、り、と、見、ゆ、れ
 此、集、小、出、さ、る、を、得、見、こ、ま、一、ど、り、七、八、首、を、あ
 り、彼、集、小、挙、け、む、ハ、げ、小、さ、も、有、べ、き、こ、と、な、り、既、く、古
 今、集、序、小、吉、野、の、山、の、櫻、ハ、人、麻、呂、の、心、小、ハ、雲、の、と、の
 み、あ、む、お、も、り、え、け、る、と、あ、る、小、見、立、さ、る、こ、む、人、ハ、自、知
 人、麻、呂、の、歌、小、花、紅、葉、を、雲、錦、小、見、立、さ、る、こ、む、人、ハ、自、知
 と、ハ、一、つ、も、あ、る、こ、と、あ、さ、ハ、此、集、を、讀、さ、ら、む、人、ハ、自、知
 べ、い、さ、む、の、り、萬、葉、小、暗、き、世、あ、り、け、れ、バ、か、む、あ、り、の
 事、ハ、な、ど、の、あ、る、べ、き、こ、れ、小、て、と、の、く、奉、い、ふ、及
 ぐ、契、沖、の、云、い、ご、と、く、檢、へ、も、ら、せ、る、の、み、ふ、て、他、の

吾情湯谷絶谷浮尊邊毛奥毛

才識の聞あり源順ふども、
 万葉ハ得讀とられざりし小
 て、そののあみと思ひやるべし

依勝益士

湯谷絶谷ハ、ゆさくと心の動揺をいへり、古今集小、大

舟のゆこのあゆふと云る小同ド○浮尊ハ、品物解

小いへり、池沼ふど小生るものなり○邊毛奥毛ハ、池

沼などの邊方小も奥方小もと云なり、池沼ふど小も

奥とよむこと。三卷小既く委く云りき。○歌意ハ。浮尊
の池沼おどの水。上小浮びこゞよひて。邊方小も奥方
小も依ぬお如く小。吾心もゆとくと揺ユぎ動ウツきて。つい
小心を一方小よせ定めて。鎮むる事を得ウツざらまゝと
とあ

り

ヨス ハナニ
寄花

コノ ヤマノ モミ チノ シタニ サク ハナヲ アレ ハツク ニ ミ ツト
是山黄葉下。花矣我小端見反

コフルモ
戀

花矣ハ。本居氏云。矣ハ咲の誤。て。咲花サクハナふりし。下上
小なりこるあり。○見反戀ハ。反ハ。乍の誤なり。同人
云り。さらバ末。句ハ。アレ。ハツ。ハツ。ニ。ミ。ツ。コ。フル。モ。
とよむべし。○歌意かくれ。とる。ところなし。女を花小
あといふ
るなり

右一首。柿本朝臣
人誓之歌集出。

イキヲニオモルアレヲヤマダサノハチ
氣緒爾念有吾乎山治左能花

ニカキミガウツロヒヌラム
爾香君之移奴良武。

ヤマダサ
山治左ハ契沖常もちさの木と云ものなり十一小も。
山ぢさの白露おもみとよみ十八長歌ふもちさの花
さけるさのりふなどよめり和名抄小本草云賣子木
和名賀波知佐乃木とあるもさゞ知佐の木のこと小
やと云りなる品物解小委云り〇歌意ハこれハ命ふ
のけておもふものと君ハ山ぢさの花のうつらふや

うふをや心おをりぬらむの。

さてもうらめぐさ事そとなり

スレノエノアササハヲヌノカキツハタキヌ
墨吉之淺澤小野之垣津幡衣

ニスリツケキムヒシラズモ
爾摺著將衣日不知毛。

アサハヲヌ
淺澤小野ハ住吉郡今の大歳神社の東南の方小あり
て今田圃とふれる地ふりとそ風雅集俊成いざや子
る淺澤小野ハ〇歌意ハかきつをこのりつくしきを
里遠くとむ
衣小摺つけそめて著むその日をいつとまらざさて

も待遠トやとなり。かきつをさハ。紫ムりるをく小不
ふものふれば。それをうつくしき女ム多とへて。その
女と事のなるを。衣ム小りつくる小多とへさるなり。
かきつをさを衣ム小摺ことハ。十七ニ丁。小加吉都播多
衣爾須里都氣麻須良雄乃服曾此
獵須流月者伎爾家里とよめり

秋アキ去者。影毛將爲跡。吾蒔之。韓

藍井之花乎。誰採家牟。

影毛將爲跡ハ。本居氏影ハ移の誤ムて。ウツシモセム
トとよむべし。移ムをハ。染るを云ふりと云り。今按ム小毛
も爾の誤ムて。ウツシニセムトとありくハあらざ
や。さらバ移ムと云こと體言小なりて。移ム染小爲むと
云こと小なるなり。○歌意ハ。秋小なりて。花さきさら
バ。その花をと里て。移ム染小染むと。深く思設けて。吾蒔
生く。韓藍の花と。誰の他方小採取ムて行
けむそとなり。女を韓藍小多とへさり

春日野爾。咲有茅子者。片枝者。

未含有言勿絶行年。

未含有ハ契冲云。含ハ花のつゝめると云。萩ハ秋草の中。小ぬき出さる物。其の片枝のまごさめぬと云。はりるをくさうふる。小行末をちぎる心なり。〇言勿絶行年ハ言の通ひハ絶ることふれと云なり。行年ハ本居氏云。所年の誤りて。ソ子なり。〇歌意ハ春日野のりるをくさ萩の片枝ハ咲出。片枝ハ未つゝめぬ如く。未人となりとへざる童女ふれば。吾得て妻とすべき時ハあらば。されどこの愛とき女と。他人小得

さきべき小あらざれば。今より吾小言の通ハ絶ことふれ。と行末をちぎれるなり

欲見戀管待之秋芽子者花耳

開而不成可毛將有。

歌意ハ人となりて。花の咲さる如く。りるをくさ光儀を見まくほくさ小戀く思ひつゝ待くその女ふれば。さびりるへの花々くさ事のみみて。實小成就めてハ得あるまどき小な不實小あらざりてあらむ。のさ

ても本意小かおをさるることや

と、女を芽子小比へさるなり

吾ワギ妹モ子コ之ガ。屋ヤ前ド之ノ秋アキ芽ハ子ギ自ハナ花ヨリ

者ハ。實コニ成ナリ而テ許コ曾ソ戀コヒ益マサリ家ケ禮レ。

歌意第一二句ハ序の如くいひさる小て、女小花々々
く言のみいひのをさる時小ハ、實コト小事コトナリ成就ナリさらば、
かくまでハ戀しくハ思をドと思ひしを、中々小さハ
かくて、眞實小なりてこそ、彌益小戀しく思ふ心ハま

さりてあれとなり、逢見ての後の心小くらぶればの
意あるべし、契冲云、これハ秋の實を賞して、あとふる
小ハあらだ、第十小も、このやど小さける秋をさ散過
て、實小なるまで小君小あハぬのものとよみて、實ある
物おれば、花やの小云、こさるよりハ、あひみて
眞實をみるのまされり、といふ小、ことふるなり

ヨス イ子ニ
寄稻

石イソノ上カミ振フル之ノ早ワサ田ダ乎ヲ。雖ヒデ不ズ秀トモ。繩シメ谷ダニ

延與守乍將居。

振之早田乎ハ第五句の守乍と云へつゞく意なり不
秀とも守つゝ居むと云なり第三句へ直小續てハ聞
べのらむ○雖不秀ハ穂小出むともと云意ふてまご
いをけあき人ふるとふ○繩谷延與ハ標繩ふりとも
引延よとなり繩ハ舊訓のまゝ小シメと訓べし繩ハ
やがて去めおればなり畧解ふハとよみハいと
さるそ十卷四十四小足曳之山田佃子不秀友繩谷延與
守登知金同九打細爾鳥雖不喫繩延守卷欲寸梅花鴨

など皆シメと訓べし○歌意ハいまご穂小ハ出ざれ
バ刈取べき時小あらむよハ刈取むとも標繩なり
とも引ハへよさらば吾それを他人小刈去め守つ
つ居らむとありいまごいをけあき女なれば取得べ
きふあらむされどりつくしき少女おれば他人小ハ
得させどつひ小吾物とせむとおもへば他人の得ぬ
やり小ちざり置てよと仲媒小か
さらふ意をことへもるふるべし

寄鳥

明日香川七瀬之不行爾佳鳥

毛意有社波不立目。

七瀬之不行とハ七瀬ハいろき川の瀬のおほあるを
云り五卷小麻都良我波奈奈勢能與騰波ともよめり
鈴鹿川小八十瀬とよめる類なり不行ハ義を得て書
るなり不通不逝おどの如し○歌意ハ契沖七瀬小よ
どむ水ハ水鳥の心ふハかなふまどけれどさりとして
いづくみうつりむむべきふもあらばと思ふ心あれ

バこそ波を立て打さこきても立さらぬすむらぬ七
瀬のよどのよどみがあたるやうふさるることのみ
ありてあふことなき中もさりとしておもひたて、誰
ふかへりつらむとありと云り今案小あきの川ふき
む水鳥も七瀬のよどの志づのある處小處得てまむ
ふれば心ありてこそ波をはふり立かどして人ふも
あられぬあぶくひそみて住ふれされば吾中も人ふ
あられてとふかく云さこのれぬべきこと小あらぬ
といふふもあるべし吉野爾有夏實之河乃川余杼爾
鴨曾鳴成山陰爾之氏おどいふごとく志づのある處

得てむむと淀

小住と云るの

ヨス ケタモノニ

寄獸

三國山木末爾住歷武佐左妣

乃此待鳥如吾俟將瘦

三國山ハ契冲云越前國なるべきの神名式云越前國坂井郡三國神社繼體天皇紀云男大迹天皇譽田天皇

五世孫彦主人王子也母曰振媛云々天皇父聞振媛顔容妹妙甚有嫩色自近江國高島郡三尾之別業遣使聘于三國坂中井中此納以為妣云々天皇幼年父王薨振媛廼歎曰妾今歸寧高向高向者越前國邑名奉養天皇云々日本紀ふよれば三國の内小坂中井サカナナ井と云處も高向タカムコと云處もあるなり延喜式和名抄ふよれば坂井郡小三國高向ありのれバ坂井郡もとみる三國なり此所小三國山ありべし和名抄小越前國坂井郡高向多加無古これをいへり○住歷ハ住の伸り多る言ふて棲て居ると云意なり○武佐左妣ハ獸名なり品物解小具云り○此待鳥如ハ此ハ行文

ふて。トリマツガゴト。なり。鼯鼠ムサビハ木末小居て。鳥の飛
來を待て。捕食ふものなれば云り。○歌意ハ。三國山の
梢小棲て居るむさびの鳥の飛來るをりあひ待
居る如く。吾も人と待小待久しく。いつと云のぎりも
なくて。やせおとろへむそとな

り。畧解小終句を。ワヲマチヤ
セムとよみいひあふ

ヨスクモニ

寄雲

石倉イハクラ之ノ小野コノ從秋津アキツ爾ニ發渡タチワタル雲クモ

西裳ニシモ在哉アレヤ時乎トキヲ思將待シマタム

石倉イハクラハ。契冲秋津小立とると云るふて見れば。石倉
の小野コノといふも。大和國なり。類字抄小山城小屬コノ
るハ非ありといへり。○秋津アキツハ。吉野の秋津あり。○雲クモ
西裳ニシモ在哉アレヤハ。之裳シモハ。多ある物の中小。その一ツをとり出
ていふ助辭なり。さればこゝハ。羨アヤしき物の多ある中
小。雲をいとへ小羨アヤしく思ふよシなり。在哉アレヤハ。あれ
の意なり。○歌意ハ。石倉の野より。をるぐと秋津の
野まで。見るがうち小立とるとる雲クモふてもが。吾身カラの

あれのし。さらば通。路遠き中をも。こをやく通行て。
逢ことのなるべきを。こる雲ふもあらねば。あふべ
き時の来るを待居む。
とあげきあるなり

ヨス イカヅキ

寄雷

アマ クモノチカクヒカリ テ ナル カミ ノ ミレ バ カシヨシ
天雲。近光。而響神之。見者恐不

子 バ カナシ モ
見者悲毛。

歌意ハ。高貴シナタき人をとことへこるなるべし。相見れば志
あをのふおそれを。のらしく。又さりとして相見ねば。
こひしく思をれて。あなしく堪がさければ。ニ。へふ
ことりて。さても為む方なり。やとなり。上ハ恐カシヨシといふ

む料の

序なり

ヨス アメニ

寄雨

コ、ダクモ。フラヌ。アメユエ。ニハ。タツ。ミ。イタク。ナ。
甚多毛。不零雨。故庭立水。大莫

逝^{ユキツ}人之應^{ヒト}知^{ノシル}。

不^フ零^ラ雨^ヌ故^メハ。ふらぬ雨あるものとの意なり。○庭立水
ハ。二ハ。夕^タヅ^ツこふて。ツを濁るべきふ。此小立字を書る
ハ。既くも云る如。凡て借字小ハ。清濁のさみ小通用い
たること。此集の例なり。○大^イ莫^タ逝^ナ。大ハ。太字の誤なら
されど。大^タ字^ジふても。ハ。甚^シ流^リれゆくことなればの意
ハ。知^チカ^カと訓るべし。ハ。甚^シ流^リれゆくことなればの意
なり。○歌意ハ。をふらぬ雨あるもの
潦水よ。志かむのり甚くなればゆきて。人小雨のふり
多^タ量^リと云ことを。志らるることなればとなり。契冲云。

これハ志のひて思ふ思ひを。をなをぶくもふらぬ
雨ふことへ。涙を。ふを。づみふ多とへて。戀を。と人の
あるむの量ふ。志のひふるおもひふこぶる
る涙ハ。いあくなあおれそ。といふ心なり

久^ヒ堅^サ之^{カタ}。雨^ノ爾^{アメ}波^ニ不^ハ著^キ乎^ヌ。恠^ヲ毛^シ吾^モ。

袖^{コロモテ}者^ハ。干^{ヒル}時^{トキ}無^ナ香^キ。

歌意かくれ
るところな

寄月 ヨス ツキニ

三空往月讀壯士。夕不去目庭。

雖見因縁毛無。

ミレ ドモ ヨル ヨシ モ ナシ
ユラサラズ
夕不去ハ契沖云よひくなり。一夜もおちぎの心なり
○歌意ハ月のおもゝろくおつゝのいきよひく目小
ハ見ハせれども親くよりそいてかゝらふ爲方もあ
しとなり。高貴人と月小比へゝるなるべし。四卷 丁 廿六

春日山山高有良之石上管根

將見爾月待難。

カス ガ ヤマ ヤマ タカ ヲ ラ シ イソノカミ
管根おどやのふらむ本居氏ハ。
フルサト
舊郷の誤のと云り。猶考べし。

闇夜者辛苦物乎。何時跡吾待

ツキモハヤモテラヌカ
月毛早毛照奴賀。

歌意ハ闇夜ハ心もくもりていとゞ人の戀しく思え
れて爲む方ふくくるしきものといつゝの出むいつ
しの出むと吾待月ごふも早くもぶか照出よのしさ
らバその月を見てふぐさむのともあるべきあれば
今の如く苦しくハ有まじきとなり。月毛ハ月ごふ
もせめての謂なり。毛の言味ふべし。契沖ハ夜ハ人待
つ人のこぬほといハ夜のうちふもやみの夜のやうあ
れバくるしといへり。ご待月ハ人の光臨をまつふ
よせさりと云り。いあむ。あむ。闇夜のやうあれば
くるしといへること。きととりあさきことなり。

アサシモノケヤスキイノチタガタメニチトセモガ
朝霜之消安命爲誰千歳毛欲
モトワガモハナクニ
得跡吾念莫國。

歌意ハ朝霜の如く微くをのなく消失易き身命を千
年ふもぶないきなごらへよのしとねぶふハそも誰
が爲ふとの思ふ其方故ふこそ。壽
の長のらむことを欲へとなり

右一首者。不有譬喻歌類也。
但闇夜歌人。所心之故。並作

此歌。因以此歌。載於此次。

所心畧解。小心ハ思の誤のといへるハさるゝ所心と云こと。集中おおろく見えざるをや

寄赤土

山跡之宇陀乃真赤土左丹著者。曾許裳香人之吾乎言將成。

左丹著者。者、字、舊本おふきハ、脱。左ハ真小通ひて、美稱と云なり。丹ハ赤土なり。も、真赤土の衣お著らばハ、も、宇陀の真赤土の衣おりつ里著らば、それをも人のと小のくいひて、て、さ、このむのとな里

寄神

三幣帛取神之祝我鎮齋杉原。

燎木伐殆之國手斧所取奴頭旋

歌

三幣帛取ハ。ニ。又。サ。ト。リ。と訓べ。ト。ル。とよむ。御幣帛
を取て。い。え。ふ。と。云。意。お。つ。ゞ。き。り。〇。神。ハ。カ。と。訓
べ。神。を。い。わ。と。よ。む。ハ。大。神。ふ。〇。殆。之。國。ハ。邊。り
む。む。を。い。ふ。言。ふ。て。既。く。委。云。り。去。く。ハ。戀。之。久。か。ど。い
ふ。之。久。小。同。ド。〇。所。取。奴。ハ。ほ。と。く。小。取。れ。む。と。せ。と
云。べ。き。を。か。く。奴。と。云。ハ。例。あり。幾。死。と。云。む。を。と。む。ど

あなむと一きと云意あるをほとむどあふきと云の
ごと一〇歌意ハ神祝の御幣帛を取持ていつきい
ふ杉原を犯して薪を伐禁衛の人小見あらをされて
殆手斧をとられむと一つと云るふて父母あどのか
とく守る女を犯しいざあひてほとむどからき目を
見むとせしと云譬ふるべし又ハやむことあき人を
おかりてほとむど罪ふかゝらむとせしと云ふもあ
るべしさて神木をいみく大切小おそるゝことハ
四卷十八小神樹爾毛手者觸云乎打細丹人妻跡云者
不觸物香聞とよみ又味酒乎三輪之祝我忌杉手

觸之罪歟君二遇難寸。又景行天皇紀小五十年八月。
云々所獻神宮蝦夷等云々仍令安置御諸山傍未經幾
時悉伐神山樹呼隣里而脅人民天皇聞之詔群卿曰
其置神山傍之蝦夷是本有獸心難住中國故隨其情願
令班邦畿之外とあるも神水を伐しことをいみ
しくのこませるまい故あるを思ふべし

木綿懸而祭三諸乃神佐備而。
齋爾波不在人目多見許増。

祭三諸三諸のことハ既云里十二小祝部等之齋三
諸乃犬馬鏡云々十九小春日野爾伊都久三諸乃梅花
云々おども見えさり○神佐備而ハ御室小祭拜る神
の神々一きよ一ふいひ下してふるめきさるよ一ふ
いひつゞけさり人をふるきものふしてと云意お里
○齋爾波不在とハ神をバ齋敬み畏避れバ云る小て
人をふるきものふして神を畏避るごとく遠離る小
ハあらざと云なり○歌意ハ人をふるき物ふしてい
とい遠離る小ハあらざ人目あげ
くて得あをぬふこそあれとなり

木綿懸而齋此神社可超所念

可毛戀之繁爾

歌意ハ木綿を懸て祭拜する神社なれば常ハ尊敬畏避
て親づくことさへえせざりし今ハ戀しく思ふこ
との志げく心の亂れされば志のむる尊き神社と
も敬ふべきさきまへむなくをどり超ぬべくおもひ
る哉となり十一廿八小千葉破神之伊垣毛可越今
者吾名之惜無ハアガナノヲシキミナレこの歌伊勢物語小ちもやぶる神のい
のきも越ぬべく大官人の見まくる

寄川

從此川船可行雖在渡瀬別守

人有

歌意ハ川を舟ふのりて此方より彼方へあふふべき
道ハありといへどもその河渡瀬ごと小禁衛の人あ

りて、心まのせみ通ふことのかあをぬものと、其とい
あふとのせむといへるふて、父母兄弟あどの目を志
のひて、女のもとふかよひのときを、ゆるしあき人を
バ、渡守のとどのつて、みどりふ渡瀬をこころさぬふこと
へこ

右一首。柿本朝臣

人。謗之。歌集出。

不絶逝。明日香川之。不逝有者。

故霜有如。人之見國。

歌意ハ、我思ふ人のもとへあまの川の流れのあえぬ
如く、さびくのよふことなるふも、さるることのあ
りて、川の中よどのやうふ志を、こころりてゆの
ぬことあらば、あふを尋常あらぬ事故ありて、心ふか
あをぬを、お出来しふつきて、ゆのぬやうふ人の思を
むことあるを、其といのふの、てまゝとなり。四卷
下。他辭乎繁言痛不相有寸心在如莫思吾背とある。
心在如と、今の故霜有如と、意味似たり。此歌古今集

四、卷ふとえど行あまの川のよどみあは心あると
や人のおもえむとて載て、あるハありを誤れるなり。此歌或人の
云、中臣、東人あり

とありと注せり

明日香川湍瀬爾玉藻者雖生

有。四賀良美有者靡不相。

歌意ハあまの川の瀬々小生する玉藻ハあまのひよ
くあびきあふことあれどあまのらみあればそのあまの

らみ小さへられて心のまゝあまのひよあふことのお
らぬことなるをといへるふて、おもひあへる中あま
をる人あれば思ふやうあまのぬふるとへり。二
卷の長歌ハ明日香乃河之上瀬爾生玉藻者下瀬爾流
觸經玉藻成彼依此依靡相之嬌乃命乃多田名附茶
膚尚乎劔刀於身副不寐者とあり考あまのむべし

廣瀬川袖衝許淺乎也。心深目

手。吾念有良武。

廣瀬川ハ大和國廣瀬郡小在川なり。文德天皇實錄小
仁壽三年十月己卯速江國奏言廣瀬河舊有郵船二艘而今水闊流急不
由利涉公私行人擁滯岸上請更加置二艘以濟羈旅之
難許之とあるハ同○袖衝許ハ催馬樂小さハ田川袖
名異處ふるべし

つぐむのり淺けれどく小の宮人高橋こころともよ
めり衝ハ流る水の袖ふつゝのるよくなり契沖の十七
小多知夜麻乃由吉之久良之毛波比都奇能可波能和多
理瀬安夫美都加須毛とあるこのつぐの心ふりと
云るが如し裝束の袖ハ今も長ければその袖の漬る
むの里あるハいと淺きこと著し○淺乎也ハ人の我
のりへと思ふ心の淺とやと云なり○歌意ハ人の我

のりへと思ふ心ハいと淺かりそめなるものを吾
ハおほ心小深く思ひてあらむあかくてハ末長く
のみ小思ふともかひハあらどをやとなり第一二句
ハ淺をいをむとて設けざる詞なり。元可法師集小廣
瀬川袖つく水の
流さへ淺
くハ見え
ぬ霧の
うち哉

泊瀬川流水沫之絶者許曾吾

念心不遂登思齒目。

流水沫之。これハ今案、沫ハ脉の誤ナリ。ナガル。コ
 ヲノと訓べ。上セ。泊ハツセ。瀨川流水尾之云々と見え
 り。これハ己のえりめて考へ得るなり。○歌意ハ泊
 瀨川の水ハ絶る世ハあらどふれども、その水の絶
 るてむせもあらば、其時ふこそ吾思ふ人小逢遂む止
 めせめさなくてハいつまでもとげどとハ思をばと
 云なり。畧解ハ水沫を水脉の誤あることを得あらど
 ふととへさる。まささなくハ譬喻歌ハあらど、誓
 へる歌ふるべしといへるハ、いみじきひびごとなり。
 さて此歌ハ正しく譬喻タトヘさるハ非ど、こハ六卷四十
 久邇イヅミ新京歌ガハユクセ。泉河往瀨乃水之絶者許曾大官地遷往オホミヤトコロウツロヒニカ

目とよめる類なり。をべて譬喻歌の標内小入さるハ
 吾身人身の上のことと。萬の草木鳥獸の類ハ譬喻さ
 るハこともなし。此歌のごときハ正しく譬喻さるハ
 ハ非ざれども、萬の物小寄てよめるとバ、あべて譬喻
 歌の標内小叙イシハ譬喻歌ハ其主とある一
 方ふつきさる名目されバ、疑ふべきハ非ど

名毛伎世婆人可知見山川之

瀧情乎。塞敢而有鴨。

塞敢而有鴨ハ十一ハ言出云忌々山川之當都心塞
敢在續後紀長歌ハ堰加倍留天おどあり○歌意ハも
一長き息をつきて嗚呼嗚呼と嗟きさらバ他の故ハ
あらびと世人お知べき故ハ山川の瀧のごとく激り
てやるせおき心をあひてせきとづめて
ある哉さてくくさるべき心の内そとなり

水隱爾氣衝餘早川之瀨者立

友人二將言八方

水隱ハ志のひのくもふるとへとり○歌意ハ志のひ
かくはみ堪おねて嗚呼やる瀨おやと氣衝あまり急
流の瀨の如くさざる心のふといこきのへるとも人
ふそれといえむやハ人おはいをど嗚呼やる瀨おや
となり古今集ハ吉野川水の心ハ早く
とも多き音おはめてどとそおもふ

寄埋木

真鈍持弓削河原之埋木之不

可顯事等不有君。

真鏡持ハ枕詞なり。持ハモナとよむべし。モテ○弓削ユゲ
河原ハ和名抄ハ河内國若江郡弓削由ユゲとある所の
河なり。神名式ハ河内國若江郡弓削神社二座。並大月次相嘗
嘗稱徳天皇の御時由義宮を作らせ給ひて行幸せさ
せままへること。續紀ハ見ゆ。義字多クハ古書ハ由
義宮とかけらるるあり。その證余假字ハ用ハ所以ハ由
が南京遺響ハ委しくいへり。弓削道鏡ハ本居なり。契
冲云。今も弓削檜原ふといひつゞけて人のよくあれ
る所あり。○埋木之ハマシキ不可顯アラハルマシキと云む料あり。埋木

ハ水底の沙中ハ埋てあらざるまじきものあればあ
り。古今集ハなとり川せりの埋木あらればいのお
せむとのあひみそめけむとあり。○不可顯ハアラハ
ルマシキとよめるよろし。あらざるべあらぬの意あ
り。無仁天皇紀ハ忽積稻作城其堅不可破とある。書紀
仁徳天皇御歌ハ豫屢麻志枳箇破能區莽愚莽なども
あり。畧解ハ不可顯ハ下可戀の誤ハシタニ。○事等
不有君等字一本ハ爾と作りいづれふてもよろし
○歌意ハ吾志のいさる男女の中の人ハ顯をるまじ
とハ手堅くいたるる事ハあらぬことなるともいあ

らえれあべ其時いのふのせむとなり。

現存六帖小年經ぬる牙削の河原の埋木の浮び出べき行へ去らせよ

寄海

大海候水門事有從何方君吾

率陵

第一二句ハ本居氏オホウミハミナトヲマモルムベトイヘリ大海ハ大海神をいふベ即大綿津

見神なり○何方ハイヅトよむベ○吾率陵ハ陵ハ隱字の誤と云説あるベアヲ井カクレムあり本居氏ハ率陵ハ義を以て井テユカムと訓ベトイヘリいのふあらむ○歌意ハ第一二句ハ大海神ハ水門ごとふ目を離しあまたを守護りましまして人の船出をあらしさまへばあひてみごりふ船を出まことのならぬがごとく父母あどの心をつけて起居おきふしこれをきびしく守りまふことおれば事ありとてさやくあひて門出せらるべきやうなしされバも吾二人の中ふ事あらバいづくそへ吾を竊み出で率て行まをむと君

いおわし〜まふふめれど率て行〜まふ〜きてごて
なれば其時いいのある方ふ吾を率行てかくれ〜
まをむとふや

と云なるべ〜

風吹海荒明日言應久君隨

歌意ハ風吹て海のある〜如く父母あどのころびハ
おそろ〜けれどもそれといといて父母のゆるさむ
時をま〜バ明日ふもあれいと待遠ふ覺ゆべ〜され
バ君〜もあをむとあらばよ〜やよ〜君ふ志〜ごハ

むそとい

ふならむ

雲隱小島神之恐者目間心間

哉

雲隱ハ契沖島へえるあの奥ふ雲が〜れてあるもの
ふればかく云と云り〇小島神とハいづくの小島ふ
もあれ集中ふ吉備のこ〜まと其島ふ座神ふりさて
父母あどのきび〜守るふことへあるなり〇歌意

ハ、父母おどのきびくまわれバ、其女小親相見ること
とのおをぞて、小島神の神威を恐るゝごとく、恐れ遠
離て、目を隔ハされども、相思心まで隔らむやハ、心を
の里ハ、いつも女小比てありとなり○今按、小雲隱と
云、小島神といへること平穩ならぞ、故案、小ハ光
字の畫の滅え、嶋ハ鳴の誤、小、雲隱光鳴神之とあり
て、雷ふるるとへるる歌ありけむを、をやくよ

り今の如く誤て、寄海歌の中、小収るるの

右三首、柿本朝臣
人麿之歌集出。

大船爾。真梶繁貫。水手出去之。

奥者將深潮者干去友。

奥の下者字、舊本、小ハなく、今ハ一本、小從○歌意ハ、浪
風の間をり、のゝひて、大船とこぎ出るとき、と小のゝ
いさづく心を、人間をり、のゝひて、からりて打出
ふことふるならむ、さて今かく打出て相云て、後小
ハ、いよく吾中の深のらむ、あとひ潮のひくとき來る
とも、磯のかゝ小こそ潮の満干ハあるなれ、奥ハ常小

志はのひることよあきむ如くい

つも深のらむそと云歟。猶考へ

伏超フシコエ從去益物乎。間守爾モラフニウチヌラ所打

沾浪サエヌナミヨマズシテ不數爲而。

伏超フシコエハ、中山、嚴水、我土左、國安藝郡フシコエ伏超と云る坂あり。そハ飛石をね石ころぐ石ふど云て、名高き難所を行過て、此坂を超ることなり。此坂いとけをくして、立てあゆみむとければ、伏超フシコエと云なるべし。此、伏超の

山の岬ハ海ふ臨みて、今ハ行のよふべき處ふあらざ、いふ一ハ浪間をうのゝひて、道行人もかよひしやあらむ。叔此歌ふよめるハ、土左、國とも定めてハいひのこし。惣て地、名ハいづくも同じきものあるものあればなり。されども伏超と云る處ハ、いづくもあつる所なるべき據とハなりぬべしと云り。○行益ユカマシ物乎モノヲハ、行ましものふてありしとの意なり。伏超の方を行マぞして、浪マモラフニふぬらされしを、後モシふ悔る謂なり。○間守爾ハ、浪の打よせ引とる間をうのゝふの意あり。打よせしる浪の、引とる間を候ウカひてゆのむとてと

謂なり○所打沾ハ打よめる浪小沾されたるよりか
り尾ふめぐらしてきくべし○浪不數爲而ハ打よめ
る浪の數を數計るを浪數といへば浪數ハ浪の數を
かぞへて打よせざる浪の引ざる間をうのふこと
なりさてこゝハふつ小浪數ざりし詞つきふれどさ
ふハあらば浪を數ハあつれどもよくせざして數そ
こねて浪小沾されざるを謂なり○歌意ハ伏こえの
のこより行通いあば浪小沾されむおそれおければ
伏超の方より行まゝものふてありしを近道を行む
とて打よめる浪の數をかぞへてその浪の引ざる間

小海際より通り行むと浪間をうのひまもりし
あまり小心いられて浪の數をのぞへあつれど
もよくせざしてかぞへそこねて浪小打ぬらされつ
ると悔るよしみてあとへざる意ハよくして人目の
なき間をうのひて行へりしものを人目を守ハ
あつれどもあまり小心あこゝしありしふよりて
人目を守りそこなひて見あらをされれば今ハ悔
れどもそのかひなくして人間のみあひ志
のひ通ふべのりしものふてありしとなり伊勢物
語ふるびのさなりければあるべきつけて夜ごと

小人ををきて、まもらせけ
ればとあるを思合べし

石灑岸之浦廻爾縁浪邊爾來

依者香言之將繁

石灑ハ灑ハ隱の誤イソガクリ。伊ソガクリあるべしといへり。さもあるべし。岸の浦ハ磯隱イソガクリてよある浪とつづく意なり。石隱ハ多浪のよあるさまをいへるのみなり。人目を去のふ意をよ。○歌意ハ思ふ人の邊キリハ依近

づきこくハあれどもも一依近づきこらば世人の言
志げくとふかくいひさこのむのとなり本句ハ序な
り

磯之浦爾來依白浪反乍過不

勝者雉爾絶多倍

磯之浦ハいづくふまれとゞ海の磯への浦なり○雉
ハ四巻ハ涯とあるハ依てこゝも涯の誤ある岸の借

字なるべし。雉をも古ハ吉斯と斯を清て唱へしなる
べし。と吾徒南部嚴男云り。金葉集小兩ふれなきも
志と小成ふけりかき
ぎならバかゝらまゝやいとあり。吉斯の斯を和名抄
清て唱へし故ふ。此も岸を雉小よせさる小や。和名抄
小雉を支々須とも支之とも云り。吉斯と云も古名ふ
らむ。○歌意ハ磯の浦小依白浪よしかをの里立のへ
り立のへり。此所を過めて小のみさるならば。ふ引
行て異所小はよせせ小。此處の岸小ゆくとゆらへ
てあれとなり。此歌ハ思ひかをしさる男の女の家の
あさり小來て。人目をばのりつゝ。えあふこともせび。
そこを過行めて小さるを見て。女のよめるなるべし。

反乍過不勝者ハ古今集小こがやど小咲る藤なみ立
のへり。をぎかて小のみ人のみるらむとある。立のへ
りをぎかて小と云ると同意小て。立のへりくゝつ
つ。過めて小さるをいふ。過不勝者ハ過めて小無バと
いふ意の詞つきなれど。さ小ハあらせ。過めて小さる
ならバと云意なり。この詞のことハ既サキふ多びくいへ
り。きく小ゆらへハ。なるそのあさり小ゆらへてい
ませ。さらバひまもとめつゝ。あふこともあなひ侍ら
む。そとい
ふならむ

淡海之海浪恐登風守年者也

將經去榜者無二

歌意ハ浪風のおそろしき故ハ浪風の和む間と守りりあひて船のりてをることなるハ浪風をよく静まりて今こそと思ふ日和なければ漕も得出さざりてとのくをるりちふ多くの年を経あむのといへるふて浪恐登風守ハ人目人言のおそろしき故ハそれをまもるをそハ榜者無二ハ近くよりて相見

ることをよせていへるふてかくのみ人間をまもりつゝあふこともえせざりて多くの年を経あむことあといふなるべし

朝奈藝爾來依白浪欲見吾雖

為風許增不令依

朝奈藝爾ハ第三句の上ふりつて聞へし静あることいへるふて人目の間をいふなるべし歌意ハ來よる

白浪を静ふる間ふ見まわしくいれども風こそ心
してよせきさらねと云て思ふ人を人目のあき間ふ
見まわしくいれどさゝふる人あり
てよせ來させぬを譬するあるべし

ヨスマナゴニ

寄浦沙

ムラサキ

ノ

ナ

タカノウラ

ノ

マナゴ

ツチ

ソテ

ノミ

フリ

紫之名高浦之愛子地袖耳觸

テ

子

ズ

カ

ナリ

ナム

而不寐香將成。

ムラサキノナタカウラ

紫之名高浦ハ本居氏玉勝間云名高の浦ハ紀伊國

名草郡ふて今ハそのことり海士郡ふ入れり今も名

高とも名方とも云里ふて藤白のをこ北の方なり

あるとき若山ふて人ふ物語けるついでふ一人の

云やり名高の里中小むらさき川と云ちひさき川の

あるふりと云そはいとおのきことなるをも萬

葉の歌ふよりて事好むものつけたる名ふハあら

トの猶多しおといきのまわきことなりとおの

れいひ又一人おのれおのあさりハ志をくゆきのよ

ふところふればいまよくあさいといきとてむと云

るの。後小又きこりこりかこりけるハ一日名高の
こり物せしふかの川のこと。里のこらハへのあそ
びるこりこり。此里ふむらさき川と云川やあると問
し。のばよくあまゐて。ちいさき流れ小橋のけこる所
を。これあむそれとをこりつとをかこりける。あまこ
らへまでよくあれるハ。つくりことふハあらざめ
るを。もこりこれふるき名ならば。この萬葉小むらさき
の名高とつづけけるハ。いふこりこりこのわこりを村崎
など云て。そこある名高の浦と云るふハあらざめ。さ
れどこの川のこと。あは人つてあれば。あまのふハ云

がこきと。かこりこり物せむ人なるよくあづね給へと
あるせり。枕冊子小。浦ハ云々。名高の浦とあり。さて此
地名。此。次下。又十一四十ふも見えこり。又十六廿六ふ
紫乃粉シノコ乃海爾ウミニ潛鳥カクトリとよめるも。そのあこりあらむ
この愛子地ハ。マナゴツチとよむべし。織沙マナゴのある地
と云。さて人の子と愛しみて。最愛子マナゴと云。バ。即此マナゴをう
るを。こき女ふもとへこるふもあらむ。○歌意ハ。りる
えしき最愛女マナメ小。袖をのり行觸こるのみふて。つひふ
相宿せざありあむの。袖をのり行觸こる
のみふてハ。止まじき女なることなり

トヨクニノノ。キクノノハマヘノノ。マナゴツチ。マ
豊國之聞之濱邊之愛子地真

ナホニシアラバ。イカデナゲカム
直之有者何如將嘆。

聞之濱キクノノ聞字舊本ふ間と作るハ。和名抄小豊前國企

救郡岐久キク一本小岐多と令義解ふハ。規矩郡とのけり。

雄畧天皇紀小十八年秋八月云々物部目連自執太刀

使筑紫聞物部大斧手執楯叱於軍中俱進とあり。十二

廿二小豊州聞濱松又トヨクニノノ豊國乃聞之長濱豊國能聞

乃高濱十六タカハマ小豊國企玖乃池奈流ふど見ゆ○愛マナ

子地ハ真直といえむとての序なり○真直之有者ハ

まをぐふあらバといふ意なり爾之と連なるハその

さごの小まある意をさのせらる辭ありいふ言のこ

のをぞさごのふその通りまをぐふらバの意なり○

歌意ハいふ言のこのをぞそのいふ通ふさごの小真

直ふあるならバ何とて嘆のむなれども言のみふて

ハものみふなりがこきふ

よりて嘆のるゝそとなり

ヨスモニ
寄藻

シホミテバ イリヌル イソノ クサナレヤ ミラ
塩満者。入流磯之草有哉。見良

ク スクナク コフ ラ ク ノ オホキ
久少。戀良久乃太寸。

歌意ハこの思ふ人ハ塩が満來れば没ぬる磯の草小
てあれを小や見ることハいとまれ小をかくして
えみだて戀しく思ふことの多きとなり。濱成式云。雅
體十種云々。十新意體。此體非古事。非直語。或有相對。或
無相對。故云新意。如孫王塩焼戀歌。曰志ふみてべいり
ぬる磯の草あら。見る日さくふくこふる夜おやみ

譬如潮關之磯。盈時不見。落時纔見。故塩為喻。遠古雅旨。
故曰新意。下句是相對也。袖中抄小。萬葉ハ見らくさく
ふくこふるくのおやきとあると。彼式ハ見る日さ
くなくこふる夜おやみと云り。されど大旨ハ同事な
り。

オキツナミ ヨス ル アリソノ ナノリソノ コノ
奥浪依流荒磯之名告藻者。心

ウチニ ナビ キ アヒニ ケリ
中爾疾跡成有。

名告藻者者ハ之を草書_ハて誤れるなるべしナノリ
 ソハと訓べし疾跡成有ハ通難_ニ誤字なるべし中
 山巖水次の歌ふよるハ疾跡の二字ハ靡の一字を誤
 成ハ來とありけむと草書_ハて誤りさてもトハ有來
 とありしと下上ハ寫誤れるならむさらバナビキタ
 リケリあるべしと云リ今按_ル成ハ相の合の誤あ
 るべし靡相有とありしあらむの○歌意ハ人こそあ
 らぬ心の中ハ此方彼方互ハ靡相ふけりといへる
 の本句ハ序
 なるべし

ムニヤキノナタカノウラノナノリソノイツニ
 紫之名高浦乃名告藻之於磯

ナビカムトキマツアレヲ
 將靡時待吾乎

歌意ハ本句ハ序_ハて強_カあることせバ人ハとみか
 いハさこのれむとて自靡_キ依む時を待居る吾_ハあれハ
 いさハの心ハ疎くおれるハ

ハあらざるものとなり

アリソコスナミハカシシシカスガニウミノタマ
 荒磯超浪者恐然爲蟹海之玉

藻之憎者不有乎。

然為蟹ハ集中小多き詞なり。然一あつらふの意なり。新古今集ふもかくいつく暮ぬる秋と老ぬればあつらふなる物そ悲しき。○乎舊本ふハ手と作り。今ハ一本小從○歌意ハ玉藻を得まやくハ思へども荒磯とて浪荒く高ければそと凌ぎて強小行て得むことハ危くおそろし。あの一なるらそのうるえしき玉藻のまぶこのあつの一く憎のらぞあればつひふハ浪間をうらひて行て得むとおもふことなり。

これハ父母あどのさへて娶めしき女をあとへしるなり

寄船

神樂聲浪乃。四賀津之浦能船。

乘爾乘西意常不所忘。

乗西意とハ人のうへふこが心をうつしおきしるをいふことなり。集中小これのれ出する詞なり。後撰集

後撰十丸
おくれがそ心
よ乗てこのる
べき浪よ承よ
船見えはとも

十九ふおくれぞを心小棄てこがるべき浪小求ふ船
見えどとも○歌意本句ハ序ふて人のうへ小こゝ心
とりつーおきこるより常ふその人のうへのおもを
れてこをらるゝいまもさらふなしくなりさて此歌
ハ譬喩とも

きこえは

百傳八十之島廻乎撈船爾乘

西情忘不得裳。

百傳のことハ既いへり○歌意本句ハ序ふて人の
うへ小うつーおきこるこゝ心とあむー休息めむと
めいのおそしてこをれむとおもへどもつこのあひ
ごも得こをれどさても戀しくおもたるゝ事となり

島傳足速乃小舟風守年者也

經南相常齒無二。

島傳ハ海の島々を登傳て撈ふなりハ卷廿小難波
方三津埼從大船爾二梶繫貫白浪乃高荒海乎島傳伊

別往者云々十三四小谷取而丹生檜山木折來而機爾ツクリマカケヌキイソヨギタミツシマツクミレドモアカズミヨシヌノタキモトコロニオツル
 作二梶貫磯撈回乍島傳雖見不飽三吉野乃瀧動々落ハマツクスイツツタラ
 白浪とあり濱傳磯傳などいへることあり○足速アハヤ
 乃小舟とい舟の輕くてとくゆくを云元可法師集小島づとふあり
 乃小舟とい舟の輕くてとくゆくを云元可法師集小島づとふあり
 徳天皇實錄小嘉祥三年九月壬辰授播磨國足連手速神從五位下とありハ因ある神名あり十四小
 母毛豆思麻安之我良乎夫禰とあるも足輕小舟小て
 同意なり又相模國風土記ふも足柄山の杉をきりて
 船小造れる小その足のいと輕ありければ山の名と
 ふれたるよー見えりと云り○歌意ハ上小淡海海浪アラミノミナナミ

恐登風守といふ歌カシモトカゼモリ

小引合て考べし

水霧相奥津小島爾風乎疾見ミナギラフオキツコシマニカゼヲイタミ

船縁金都心者念杼フ子ヨセカ子ツココロハモヘド

水霧相ハ齊明天皇紀御歌小阿須箇我播瀨儼蟻羅毗ミナギラフ
 都々喻矩瀨都能阿比娜謨儼俱母於母保喻屢柯母と
 あり○歌意ハ心小ハ依多くおもへども風ハ疾く荒
 き故小奥つ小島小よることを得せむとなり五三

一二四と句を次第て心得べし。鳥をおもふ人ふると
へさて父母おどの噴コヒを恐れて、いひよりのこきよ
をそへ

こり

殊コト放サカ者バ奥オキ從ヨ酒サカ嘗ナム湊ミナト自ヨリ邊ヘ著ツカ經フ

時トキ爾ニ可サ放ク鬼ベ香キ

殊コト放サカ者バハ、まづ殊コトハ借リ字ヲ小シて、如コトなり、かくの如く吾と
遠トホ離サケむとならバの意なり、さて如コトハ常ト小シハナニ。碁

登トクレノ碁ゴ登トと碁ゴの言濁れども、其ハ上より連ぬる
音便小て、本ハ清音小て、首小許コト登ト云々と云ときハ、清
例あり、允恭天皇、紀御歌小、許コト等ト梅メ涅デ麼ハ波ハ椰ヤ區ク波ハ梅メ涅
彌ズ十ジ卷クワン五イ十ジ小、殊コト落ラ者バ袖ソデ副サヘ沾ヌレ而テ可キ通ト將マシ落ル雪ユキ之ノ空ソラ爾ニ消
爾ニ管ツツ十三サウ三サン十ジュウ小、琴コト酒サカ者バ國クニ丹ニ放サカ嘗ナム別コト避サカ者バ宅イヘ仁ニ離サカ南ナム古
今集春、下小、許コト等トあらバ咲サぢやハあらぬ櫻花、見ミる我
さへ小まづ心な、離別小、ことならバ君とまるべく
ふねハあむのへそハ花のりきふやハあらぬ、かきく
らーことハふらあむ春雨小、ぬれぎぬきせて君をと
どめむ、戀コイ五小、ことならバ言の葉さへも消あむ、見

れバ涙の瀧まさりけり。誹諧歌ふことあらば思をど
 とやハ云をてぬ。何ぞ世中の玉をまきなる。後撰集春
 小許等コトあらば折盡してむ梅花。我待人の來ても見な
 く小などある許等皆同ト。古今集のことあらむの歌
 を。顯注齊勸カク。離者ハ。殊更
 小我をさけむとあらばと云意なりといへるハ。い
 ことあり。凡この許等の言をよくとし得る入む
 一より多くあり。源氏物語帚木小なびの女一と
 見れば。餘り小あさけ小引こめられて。取あせバあど
 めく。此ををどめの難とせべし。ことの中あめな
 るまじき人の。うりみのあるハ。物のあをれあり
 ぐ。中あきついでのおさけあり云々。とあること
 如。此中おと云意あり。○湊キヨ自云々とハ。湊ハ船のいり
 隠むところをいろく云。邊ヘハ岸側キレギハをいへば。湊より邊

著ツクよー小いへるなり。○邊ヘ著經ハ。邊附ヘツクの伸カクる小て。
 邊の方小附むとして居ると云意なり。○歌意ハ。かく
 の如く小遠ざけむとならば。をどめ奥の方小居る不
 と小邊の方小よせつけぎ遠ざけあむ。舟を湊のら程
 なく今ハ邊方小つらむとして居るとき小至りて。遠
 ざけむものハと云ふて。事ならむとあるを小至
 りて。事とげだなののさのれ
 るをあとへいふなるべし

挽歌

カナシクウタ

鏡成吾見之君乎。阿婆乃野之。

花橘之珠爾拾都。

鏡成云々ハ鏡の如く大切ふこの見一君と云なり○
阿婆乃野ハ大和國添上郡なり皇極天皇紀謠歌小鳥
智可拖能阿婆努能枳々始騰余謀作儒倭例播禰始柯
騰比騰曾騰余謀須延喜式神名帳小大和國添上郡率
川阿波神社とあり此所ふるべし○珠爾拾都ハ橘の
玉を拾ふ如くふ拾つと云て火葬の骨を拾ふといへ

り○歌意ハ鏡の如く大切ふ吾見一君あるを思ふに
も阿婆の野の橘の玉を取如くふ火葬の骨を拾いつ
ると

蜻野叫人之懸者朝詩君之所

思而嗟齒不病。

蜻野ハ吉野の秋津野なり○人之懸者ハ人の言の丸
ふのけて云出せばの意なり○朝詩ハ火葬の灰を朝

小詩散せしと云なり。○歌意ハ秋津野のことと。人の
言端小のけて云出せば其野ふて火葬の灰を朝小詩
散せし其君のありし世の時の思出されて嗟乎アハレ
てもものなしやと息づゐる、歎息ナゲキハ止むとなり

秋津野爾朝居雲之失去者前アキヅマニアサシルクモノウセヌレバキノフ

裳今裳無人所念モケフモナキヒトオモホユ

朝居雲ハ火葬の煙をそへしり。○歌意ハ秋津野小朝
居る火葬の煙の雲の立消て失行バ今まで死スギし人の

かこみ小見し煙もふし、び相見ることならざとい
ふく亡人の戀しく思われて昨日も今日もあわれ小
悲しと
なり

隱口乃泊瀬山爾霞立棚引雲コモリクノハツセノヤマニカスミタチタナビククモ

者妹爾鳴在武ハイモニカモアラム

これも火葬の煙を雲と見なしり。○歌意ハ泊瀬山
小霞となりて立棚引し雲ハ火葬せし妹の煙小て

あらむのこども

かなしやとなす

枉タハ語コト香カ。逆言オヨツレ哉コト。隱口ヤ乃コモリク。泊瀨山ハツ

爾ニ。廬イホリセリチフ為セリチフ云チフ。

枉ハ、狂の誤○廬為云ハ、山小葬埋れるを云○歌意ハ、

思ふ人の泊瀨山小廬してありと云ハ、狂言タコトふてあら

むの逆言オヨツレコトふてあらむのよも

まことふてハあらじとなり

隱口コモリク乃ノ。泊瀨山ハツ丹セ。照月者ノ。盈ヤマ

具カケシ為ケリ鳥ヒト人ノ之ツ子常ナキ無ナキ。

盈具為鳥ハ、舊訓ハ、こチカケシテヲ鳥ハ、集中小焉と

通用ツするところ甚多シ。こチカケシケリとよむべし

○歌意ハ、泊瀨山小照月さへも、盈具しけり、されバ人

身の無常ツ子ナキハ、道理そとあきらめするなり、十九十三小

天地之遠始欲俗中波常無毛能等語續奈我良倍伎多

禮天原振左氣見婆照月毛盈具之家利とある小同

易云。日中則
具。月盈則食。
釋名云。月缺
也。滿則缺。

秋山アキヤマノモミチ黃葉アハレミ何怜ウラブレテ浦觸イリニシ而入イモ西妹

者ハマテドキマサズ待不來。

浦觸ウラブレテ而ハ第四句の下ふめぐらゝてきくべし。浦觸ハ恍惚ホレウとして愁ひ憐む形をいふ言なり。○歌意ハ秋山の黄葉メテウツクシを賞愛みて入ふ妹ハ昨日やのへり來む今日やのへり來むと。おれくとしてうつらく立待ど。

いゝ小山道コノナカハ迷マコト入ぬる小フタのあらむ未ヨかへり來ま
さむとなり。秋の比女ヒメの死シるを山小ヤマコをふりあるを。
もみちを賞愛みて入イモと云ふイモより。二卷人麻呂
の歌小秋山アキヤマノモミチ之黄葉アハレミ乎イモ茂迷流妹モトメ乎イモ將求山道ヤマミチ不知母シラズモと
ある小

似ニより

世間者ヨノナカハ信マコト二代者フタヨ不往有之ハユカザリシ。過スギニシ

妹爾イモニ不相念者アハナクモハバ。

二代往フタヨとハリまれルへリて、再ヒ現在を経るを云往
ハ、常トコ世ヨゆクの行テ小テ、經行コトナリ。四ノ卷ヤ一モ十多小テ空ク蟬セ
乃ノ代也毛モ二多行テとある所小テを云り〇歌意ハ、世間
ハ、二フタ世ヨゆクこトハあきモのなりと人のいひけれど、
さるこトハあるまどと、豫カてハ信ヲを居るを此、あ
びス死ニ去ル妹小ふふこ、び相見ぬこトをおもへバげ小
も世間ハ、二フタ代行もの小
ハあらざりけ里とナリ

福サキハヒノ何イカ有ナル人ヒト香カ。黑クロ髮カミ之ノ白シロク成ナル左マ右デ。

妹イモ之ガ音ユエ乎ヲ聞キク。

妹イモ之ガ音ユエ乎ヲ聞キクハ、妹イモが物言モノコトを聞クと云ハなり〇歌意ウタノコトハ、いいの
なる福フクのある人の、黒クロ髮カミの白シロくなりて、年トシの老オシをつる
まで、共ニ小テ存ナ命ヲて、妹イモが物言モノコトを聞ク物モノをとおも里。
これハ妻メ小テおくれる人のよめるなり

吾ワ背セ子コ乎ヲ。何ナニ處ニ行ク目メ跡ト。辟サキ竹タケ之ノ。

背ソ向ガ爾ニ宿シ之ヲ。久ク今イマ思シ悔ク裳モ。

何處行目跡とハいづくへゆるむやハいづくへも行
ハままどと云意なり○辟竹之ハ枕詞なりこり
る竹のせなの合ふなる故小背向とつゞきさ里○背
向爾宿之久ハそむきあひてねと云あり之久ハ過
去小方小あり事と今云辭なり。パリシクイヒシ
クギョシクおど古言小多し既く云り○歌意ハある
ときハありのをさみふくありきと云如く現在カクシヨの
ときハいさゝの恨むることおどありととき死おむ
とハ思ひもよらざりて相そむきてねとことあり
し今更悔しくさても悲しやとな里あをれなる歌

庭津鳥可鷄乃垂尾乃亂尾乃
ニハツトリカケノタリヲノミダリヲノ
なり十四小可奈思伊毛乎伊都知由可米等夜麻須
ガノツガヒニキシクイマシクヤシモ
氣乃曾我比爾宿思久伊麻之久夜思母と載り

長心毛不所念鴨
ナガキコノロモオモホエヌカモ

可鷄ハ契冲此鳥のなくこ急のかけるときこゆるみ
よりて名とをるなり神樂歌小庭鳥ハかけると鳴ぬ
ありおきよくこひとよつま人もこそみれこれ
證ありと云り○歌意本句ハ長ナガキといをむ料の序のみ

小て、長き心も云々ハ、長くゆひけき心もおもふえぢ
して、おき人を戀しく思ふ小堪ぢのこく、かなしく思ハ
るゝ哉

となり

薦枕相卷之兒毛在者社夜乃

深良久毛吾惜責。

薦枕ハ、卷の枕詞なり。○歌意ハ、纏て相寝せし妻も、今
小存命てあらばこそ、嗚呼さても、相宿する夜の更行、

ハ惜やとて、更行、ことをもとしく思えぬ、今ハ其妻も
亡なりて、獨宿る夜の明るをのみ待たれば、何故小か
ハ、ふくるをとを

しまむとなり

玉梓能妹者珠氈足氷木乃清

山邊蒔散漆。

玉梓能妹とハ、契沖玉づさハ弓なるべし、弓をあづさ
とのみ云證ハ、十三の挽歌小みゆきふる冬のあし

ハさきやなぎぬをるあづさをおろみてふとらゝ給
ひてとよめり。これハさきやなぎの根のをると云の
けて、をるあづさハ弓なり。玉ハ物をとむるとき小云
詞あれば。玉づさハ玉弓と云こゝろなり。志のれば。弓
ハものこの秘藏して。手お取ものなれば。女と弓小あ
とふること。めづらゝのらぬことなり。此心おて玉梓
の妹と云小やと云り。猶考べし。○蒔散漆マキチリヌル。漆、字、舊本漆
ハ漆と作。今改つ。本居氏。蒔ハ上の朝蒔アサマキと同く。て。火葬し
て。其灰をまき散ることなり。清き山邊と云るも此故
あり。さて火葬して骨をまきちらはことハ。續後紀九

卷兼和七年五月辛巳。後太上天皇。顧命皇太子曰。云々。
予聞人没。精魂歸天。而空存冢墓。鬼物憑焉。終乃爲崇。長
貽後累。今宜碎骨爲粉。散之山中。於是中納言藤原朝臣
吉野奏言。昔宇治稚彦皇子者。我朝之賢明也。此皇子遺
教。自使散骨。後世效之。然是親王之事。而非帝王之迹。我
國自上古。不起山陵。所未聞也。山陵猶宗廟也。縱無宗廟
者。臣子何處仰云々。これ火葬小あらざしてハ。骨を散
まべきよしあり。然る小宇治皇子の比。火葬あきこと
あり。されば宇治稚彦皇子云々ハ。世の誤り傳へなり。
志のれどもかく云傳ふることハ。世中。小あまねく火

葬ることのひるまりて骨を散らるゝの有ふ
よりて古へ宇治皇子の遺命より始れることと云
傳へたるなるべし。あられれば後世效之と云ふて骨を
散ることの有しと知べきふりと云り○歌意ハ玉と
云ものハ貫たる緒を斷ハ亂散て行方もあれど捨り
まつるものなるふ愛しき妹ハその玉ふてあれむふ
や骸を火葬して清き山邊小詩ハやめて亂散て行
方もあらざるらむさても悲しき事となり

或本歌曰玉梓之妹者花可
毛足日木乃此山影爾麻氣

留者失

○舊本此處ふ羈旅歌と標して名兒乃海乎朝榜來者
海中爾鹿子曾鳴成何怜其水手と云一首と載り其
ハ既上羈旅作とあるしこの標末
ふ収て注しつればこゝふハ畧けり

萬葉集卷第七

16
125
96

